

自然化された命題？——自然的情報の命題性を問い直す

榎本 啄杜 (Takuto Enomoto)

大阪大学 社会技術共創研究センター

本報告では、「自然的情報が命題的内容をもつとはどういうことか？」という問いを出発点に、自然主義的意味論における命題性の成立条件を検討する。

一般に、ある内容が命題的であるとは、それが真または偽であるという可能性をもつことを意味する。自然主義的意味論においては、このような命題的内容を自然的情報の上位概念として説明しようとする傾向がある。すなわち、物理的に安定した因果的相関が存在する二点間に自然的情報が流れるという前提のもと、その情報の組み合わせを通じて、より上位の意味論的情報や命題的内容が説明可能であるとされる。

このような立場では、自然的情報が命題的内容の土台であると想定されており、自然的情報にも真偽の評価を適用できるという議論（いわゆる真理性テーゼまわりの議論）も、この構図の上に成立している。たとえば、Dretske や Millikan の理論では、自然的情報は誤りを含まず、常に真であるとされる一方で、Scarantino & Piccinini や Shea は、自然的情報にも間違い可能性があるとして主張している。

しかし、自然的情報が命題的内容を本当に持ちうるのかどうかは、より慎重に検討されるべきである。自然的情報の命題性を認めるということは、否定を代表とする意味論的操作が可能であることを意味し、それは同時に、そうした操作を可能にする「意味論的主体 (semantic agent)」の存在を仮定することになる。だとすれば、自然的情報が命題性を持つとは、実はすでに非自明な理論的条件を満たしていることを前提としており、自然的情報そのものが命題的であるとする議論には、慎重な理論的水準の識別が求められる。

本報告では、自然的情報の命題的理解に関連して、自然主義的意味論の内部に混在する二種の立場——すなわち、情報の流れが解釈者から独立して成り立つと考える「客観的理論」と、意味論的主体の関与を前提とする「ドクサ的理論」——のあいだの關係に注目する。ドクサ的理論は、命題的内容の成立条件を明示的に含意しているため、命題性を付与するものとして扱いやすい。しかし、客観的理論において語られる自然的情報が、果たして意味論的主体の介在なしに命題的性質を持ちうるのかは、依然として議論の余地が大きい。

本報告の目的は、自然的情報の命題性に関する議論が、どの理論水準に立脚しているかを見定めることの重要性を提示する点にある。情報の哲学・自然主義的意味論・心の哲学をまたいで論じられている自然的情報の概念を再定位し、命題性という性質がどのような構造的・理論的条件を満たすときに初めて生じるのかを明確化する試みである。